

【さくら色の一日】

桜の季節は、穏やかで美しい。

人に会うのが嫌で、普段は外に出ることはあまりないのだが、この季節だけは少し歩きたくなる。幸い近くには桜の咲いている所が何箇所もあるので、なるべく人がいないところを選んで歩くことにしている。

その日は、中でも一番見事な花を咲かせている公園へ行った。

家内を亡くして以来、どうしても人との接触がいやになり、顔見知りのいそうなところへは足が向かなくなっているのだが、家内と初めて歩いた千鳥が淵を思い出したくて、つい出かけたのだ。

公園にはさすがに多くの人が出ており、にぎやかに花見を楽しんでいる人々もいる。

公園の中はそうした人々でいっぱい、とくに家族連れを見るのがつらいこともあり、外側の歩道を歩いていた。

風が強いので、桜は見事に吹雪いている。孟浩然の「春暁」に詠われた「花落つこと知んぬ多少ぞ」の趣を感じながら、学生時代のことなどを考えていた。

一瞬、かなり強い風が吹いて桜の花びらが目の前の景色を埋め尽くした。

ひとしきり花びらが舞ったとき、その向こうに老夫婦が歩いていることに私はそのとき初めて気がついた。

婦人が主人と思われる老人の帽子の花びらを、軽く払っていた。老人は穏やかに微笑んで、婦人に話しかけた。婦人もうれしそうに微笑んで、何かを語りかけた。桜の花びらは二人を包むように舞っていた。

私は、心からこの場所に来てよかったと思った。そこには家内がいた。若くて美しい家内が。千鳥が淵を歩いた時の彼女がいた。

もう少し一緒に過ごしたかった。

私は家内のことが好きだった。

帰りに家内の好物だった「桜餅」を買った。家内の喜ぶ顔が滲んでいた。